

事例2
市部・私立

暗黙知として受け継がれてきた 全人教育の文化を言語化。 教師と生徒の共通の指針に 大阪府・私立大阪高校

特色化・魅力化の推進の背景

深刻な定員割れを機に、
魅力的な教育活動を模索

23年前の深刻な定員割れを機に、教育活動の改革を推進してきた大阪府・私立大阪高校。様々な試行錯誤の根底には、建学の精神である「知育、徳育、体育のバランスの取れた全人教育」に基づき、「生徒一人ひとりの成長のために」尽くす学校文化があった。2020年度からは目指す生徒像に「主体的に行動する『オモロイ』18歳」を掲げ、生徒主体の多彩な活動を展開。生徒が企画・運営を担うオープンスクールや、身の回りの科学に関する事象をスケッチブックにまとめて他者に説明することを通じて科学リテラシーを社会に広めていく活動である「Nプロジェクト」など、独自の取り組みが定着し、現在ではそれらに参加することを目的に入学する生徒が増えている。

2027年度に創立100周年を迎える大阪府・私立大阪高校は、創立当時の社会課題の1つだった学校不足を解消すべく、「弱きものを扶ける」という理念の下で開校された旧制中学校を前身とする。「知育、徳育、体育のバランスの取れた全人教育」を建学の精神に掲げ、幅広く生徒を受け入れ、一人ひとりの成長を第一に考える教育を実践してきた。平野宏太校長は自校の文化をこう語る。

「本校は創立以来、進学実績に重点を置く教育とは一定の距離を取り、全人教育を基本としてきました。入学者は中学校時代の学力が中位層だった生

徒が中心で、やりたいことがまだ明確ではない生徒が少なくありません。そうした生徒が本校で力を伸ばし、やりたいことを見つけ、希望進路を実現できるように教師が寄り添う、その面が見のよさが学校文化として根づいています」

しかし同校は23年前、深刻な定員割れを起こし、学校の存続が危ぶまれる状況に陥った。カリキュラムの改訂や制服の刷新など、あらゆる手を尽くし、08年度には男子校から共学化。そうして定員割れは解消されたが、以降も自校の特色を模索し続けたと、北村恭崇教頭は説明する。

「とにかく入学した生徒が大きく成長して卒業していつてほしいと、必死に教育活動を改善しました。しかし、何が生徒の確保につながっているかは

学校概要

設立 1927（昭和2）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約600人
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、島根大、北九州市立大に2人が合格。私立大は、中央大、日本大、京都産業大、京都女子大、同志社女子大、立命館大、龍谷大、関西大、近畿大、大和大、関西学院大、甲南大、武庫川女子大などに延べ491人が合格。海外大は、1人が合格。短大・専門学校進学165人。就職20人。



石丸雄基
文理特進コース長
いしまる・ゆうき
同校に赴任して10年目。
理科（化学）。



宮本 聡
1学年主任
みやもと・とし
同校に赴任して7年目。
国語科。



辻 晃子
入試広報部部長
つじ・あきこ
同校に赴任して19年目。
3学年副主任。理科（生物）。



北村恭崇
教頭
きたむら・やすたか
同校に赴任して25年目。



平野宏太
校長
ひらの・こうた
同校に赴任して25年目。

図1 「主体的に行動する“オモロイ”18歳」の育成に向けた活動(例)

夏期・春期講座	教師が担当教科に加えて、趣味や勉強中の分野をテーマにした講座を開講。心理学やボクササイズなど、テーマは多彩で、年間約100講座を開講。
CHOLAゼミ(コラゼミ)	大学や専門学校、企業と連携して、様々な分野の学びに取り組む放課後講座(全3回)。年間約20講座を開講。
オホーツク学	東京農業大学と連携したプログラムで、オホーツクの自然や地域資源について現地に赴いて学び、日本の農学の未来や地域創生について考える。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 学校の魅力を発信する生徒の活動

OS委員会(オープンスクール企画運営委員会):2017年度～

オープンスクール(OS)や学校説明会の企画・運営を担う委員会で、生徒は立候補して委員となる。委員長・副委員長の立候補者は、立候補の理由ややりたい企画などを「熱血志望シート」という用紙に1,000字以内で記入し、入試広報部に提出する。同部の教師の入念な選考によって決定した委員長、副委員長は様々な企画を立て、委員に提案。委員はそれぞれ自分がやりたい企画に参加し、当日の運営まで担当する。25年度は委員長3人、副委員長10人で、約170人の生徒が委員として参加した。



OSでは生徒が発案した企画が実施される。

PR委員会:2019年度～

生徒目線での学校の魅力の発信を目的に、広告会社と連携してパンフレットやポスター、OSで配布するグッズなどを制作する。パンフレットなどに使う写真も委員の生徒が撮影。バスの車体広告(ラッピングバス)のデザインにも挑戦した。委員には立候補してなり、25年度は約40人の生徒が参加。



PR委員会が作成した27年度入試ポスター。

※学校資料を基に編集部で作成。

曖昧で、教師自身が自校の特色を明言できないような状態でした」

「ユニークな進学校」「あったかい学校」といったキャッチコピーを打ち出したこともあったが、自校の本質を表現しているとは言い難く、定着しなかった。進学実績を重視する方針への転換も議論されたが、創立以来の方針を貫き、結果的にその道は選ばなかった。そうした中、探究学習の力キュラムを考える際の参考にするため、京都府・京都市立堀川高校を20年度に視察。同校の最高目標「『自立する18歳』の育成」に着想を得て、当時教頭だった平野校長が、目指す生徒像として「主体的に行動する『オモロイ』18歳」を当時の校長に提案した。

「一見積極的ではない生徒も、心の

中では『何かを成し遂げたい』と思っています。そんな生徒が自分で課題を見つけ、動き出せるようになってほしいという願いから『主体的に』という言葉を入れました。また、『オモロイ』という言葉は、本校では心理学者の河合隼雄氏の著書での説明を土台として、『人の心や身体を動かすような』と解釈しており、『周囲を巻き込んで協働できる』という意味を込めています」

提案は承認され、その目指す生徒像は学内外で発信されるようになった。そして、『主体的に行動する『オモロイ』18歳』の視点で校内を見たところ、その育成につながる活動がいくつもあることに同校の教師は気がついた。

「本校は実に様々な挑戦をしてきましたが、その根底には常に『生徒一人

ひとりの成長のために』という軸があり、活動を経て成長していく生徒の姿も実際に見てきました。暗黙知として受け継がれてきた創立の理念や建学の精神を今の言葉に表現したのが『主体的に行動する『オモロイ』18歳』であり、生徒の具体的な姿から本校の特色が明確になっていきました」(北村教頭)

具体的な取り組み

様々な経験から関心を広げ、やりたいことを見いだす

同校では現在、『主体的に行動する『オモロイ』18歳』の育成に向け、生徒が関心を広げ、力を発揮できるよう、多彩な活動を展開している(図1)。

有志の生徒が学校の魅力を発信する

活動も同校の特色の1つで、具体的にはオープンスクール(以下、OS)の企画・運営を行う「OS委員会」と広報活動を行う「PR委員会」がある(図2)。OS委員会は、OSのプログラムの企画・運営、会場の設営や受け付けなど、全工程を担う。入試広報部長の辻見子先生はこう語る。

「私がOSの準備をしていた際、何かやりたそうにしていた生徒に『手伝う?』と声をかけたのが、OS委員会発足のきっかけでした。部活動のリーダー紹介や生徒が講師となる探究学習の模擬授業など、生徒がそれぞれ自分の言葉で本校での経験を熱心に語る姿は『主体的に行動する『オモロイ』18歳』そのもので、そうした生徒の姿を通じて本校の魅力が中学生や保護者に十分伝わっていると感じています」

委員長と副委員長には数十人もの生徒が立候補する。生徒は立候補の理由などを記した「熱血志望シート」を提出し、入試広報部がそれを基に選考する。

「OS委員会の活動がその生徒の成長の機会として最適か」という視点で部内で議論し、選考しています。選ばれなかった生徒には理由を丁寧に説明して、前向きなチャレンジにつながるよう「対話を重ねます」(辻先生)

生徒が科学と日常生活とのかかわりなどを学び、その内容をスケッチブック

図3 生徒主体の外部発信の活動

Nプロジェクト：2023年度～

同校の卒業生である京都大学複合原子力科学研究所の中村秀仁助教と同校の教師との対話の中で、文理の枠組みを超えて、生徒に科学へのワクワク感や科学リテラシーを持ってほしいという共通の思いが確認されたことから始まったプロジェクト。生徒は化学や地学、家庭科の授業、夏期特別講座などで、放射線やエネルギーといった社会的に重要なテーマについて学び、その内容をスケッチブックに手書きでまとめ、小・中学校での出前授業（写真上）や地域のイベントなどの場で小・中学生や市民に向けて説明する。参加は希望制で、イベントごとに募っており、ある小学校での出前授業には約100人が参加した。

25年の大阪・関西万博では、文部科学省のブースに出展して、来場者に「科学のワクワク」を伝えた（写真中）。世界各国から人々が来場するため、158か国語のスケッチブックを用意（写真下）。約450人の生徒（うち文系の生徒が65%）が交代でブースに立ち、6日間で約1万人と対話した。



※学校資料を基に編集部で作成。

クにまとめて発信する「Nプロジェクト」も同校の特色ある活動の1つだ（図3）。同活動では、文理の枠組みを超えて科学リテラシーを持つ社会をつくることを目指している。プロジェクトを担当する1学年主任の宮本聡先生は同活動を通じて生徒の変化をこう語る。

「小学校での出前授業では、生徒がスケッチブックを片手に自分の言葉で学んだことを語ると、小学生は『楽しかった！』『分かりやすかった！』などと言いながら笑顔を見せてくれます。そこでうれしさややりがいを感じた生徒は、うまく説明できなかった部分を調べ直したり、生徒同士で構成を議論したりするなど、自走するようになります。そして、その生き生きした生徒の姿を見た他の生徒が同活動に参加するという好循環が生まれていま

す。時には準備不足のまま本番を迎える生徒もありますが、教師は口出ししません。周りの生徒のスケッチブックの内容を見て『まずい』と気がつき、どうにか対処しようとする。それも貴重な経験だと私たち教師は捉えています」

最初は学校が用意した場でも、経験を重ねる中で自分がやりたいことを見つければ、生徒は自分で前に進んでいく。そのきっかけづくりこそが母校の強みだと、平野校長は語る。

「入学前にまだ明確な目標がなくても、本校の多彩な活動を通じて関心を広げたり、刺激を受けて学んだりする中で目標を見いだせばよいのです。それが多様な人が集まる学校教育の価値であり、本校が『全日制普通科の魅力』を最大限に発揮する』を目指す学校像に掲げている理由でもあります」

特色化・魅力化の推進のポイント

受容と寛容の姿勢で教師の挑戦を後押し

同校は、「学校で起こることはすべて生徒の成長の材料である」と捉えている。生徒を「個」で見えて、仮に問題が生じて、それを成長の機会に変えられるような支援を徹底している。その受容と寛容の姿勢は教師に対しても同様で、生徒の成長につながる挑戦を応援する文化が校内に根づいている。

文理特進コース長の石丸雄基先生は、同コースの生徒が学年やクラス（*クラス*）の枠を超え、個々の強みや個性を生かして切磋琢磨するコースづくりに挑戦中だ。

「まずは生徒たちが相互理解を深める機会をつくろうと、初回は気まずい雰囲気が生じることを承知で、異学年で対話をする場を設けました。目指すコースづくりの実現までは長い道のりですが、先生方も賛同してくれたため、実践に踏み切れました」（石丸先生）

平野校長は制度改革を行い、自らの背中を見せて、現場をけん引している。

「26年度から週5日制に変更し、生徒に時間を返しました。私は『責任と権限は現場にある』『生徒や保護者に説明責任を果たせば、結果として失敗しても、管理職が責任を取る』と公言しています。私自身が挑戦し続けると

ともに、先生方の挑戦を評価するのではなく、生徒の成長へ向けて同じ目線で助言することを心がけています」

同校は学校を社会に開くことも大切にしている。社会の中で相対化することで自校の価値がより明確になるためだ。それを校内で共有し、同じ方向を向いた学校づくりにつなげている。石丸先生はさらに次のように思いを語る。

「各校が独自に魅力化を図り、社会に発信することは、生徒を社会全体で支えるという思いの共有や、社会の教育全体の活性化にもつながるはずで、これからも広い視野でコースづくりをしていきたいと思っています」

また、同校は多彩な活動を推進する上で、各活動が属人化しないように留意している。立ち上げ時は特定の教師が中心となって動いたとしても、活動が軌道に乗り始めた段階でいずれかの校務分掌が担当するようにしている。

「生徒からは『自分が変わった』『挑戦する勇気を持った』といった声が聞かれます。OS委員会やNプロジェクトに参加することを目的に入学してくる生徒も増えました。現在は特別活動が本校の特色・魅力の中心ですが、授業の魅力化にも取り組んでいます。これから『主体的に行動する』『オモロイ』『18歳』を育成する学校づくりにまい進していきます」（北村教頭）